他者との社会的距離とリスク回避の意思決定との関係

水上　さやか

われわれは、日常的に意思決定を繰り返して行動している。しかし、その意思決定が誰のためであるかは状況ごとに様々に異なり、ある時は自分、ある時は友人、またある時は会社(自分が会社の構成員として会社のために決定を下す)の場合もある。意思決定については今までも多く研究されているが、受け手によって意思決定は異なるとされる。例えば、Mengarelli, Moretti, Faralla, Vindras and Sirigu (2014)は、金銭的リスクを伴う課題を用いた研究から、他人のために意思決定を行うときは自分のために意思決定を行う時と比較してよりリスク志向的となることを発見した。一方で、意思決定の受け手による行動の変化はないとする研究もある。本研究では、誰のために意思決定を行うのか、またその人への感情強度に焦点を当てることで、先行研究の結果の不一致を解消するための研究を行った。

実験 1 では、金銭的リスクを伴う意思決定において、意思決定の受け手の人数と社会的距離(他人／友人)を操作し、リスク回避傾向の変化について検討した。結果、獲得状況では、他人よりも自分のための決定についてリスク回避的であったが、自分と友人のための決定に差は見られなかった。また、損失状況では、社会的距離による決定の差は見られなかった。さらに、人数は意思決定に影響を及ぼさなかった。従って、金銭リスクを伴う代理意思決定においては、獲得状況では、社会的距離が近いと自分と同じシステム 1 の情報処理(感情型の処理)に頼るが、社会的距離が遠くなると、感情強度は小さくなり、システム 2 の情報処理(熟考型の処理)に頼るようになる。つまり、獲得フレームにおけるリスク回避傾向の認知バイアス(e.g., Kahneman and Tversky, 1983)を考えると、社会的距離が遠い人のための決定は、感情強度が小さくなることによってより合理的な決定となったといえる。しかし、実験 1 では、自分と友人の意思決定に差が見られず、「友人」と言っても様々な関係が想定されてしまい、他人とは区別できても、「友人」としての操作ができていたかは不明であった。このことから、さらなる研究では社会的距離をより厳密に調査する必要があるため、印象を実験条件に加え、調査を行った。

実験 2 では、人命をリスクとした意思決定において、意思決定の受け手の印象と社会的距離を操作し、リスク回避傾向の変化について検討した。結果、損失状況では、印象が悪いほど、また社会的距離が遠いほど、よりリスク回避的であった。印象が悪い場合、社会的距離がリスク回避に及ぼす影響は減少するものの消失することはなかった。しかし、獲得状況では、印象や社会的距離は意思決定に影響を及ぼさなかった。これらの結果から、代理意思決定において、社会的距離が遠くなれば遠くなるほど、また対象とする人物の印象が悪化するほど感情強度は小さくなり、システム 2 の情報処理に頼るようになる。つまり、損失フレームにおけるリスク志向傾向の認知バイアスや、人命リスクへはリスク回避に社会的価値が置かれることを考えると、社会的距離が遠い人のための決定は、感情強度が小さくなることでより合理的な決定となったといえる。

以上より、感情強度によって意思決定は変化し、人は社会的距離が近くなるほどより期待値から外れた、非合理的な決定をするようになることが分かったが、未だ一貫した結果は得られていない。さらなる研究によって、意思決定分野における結果の受け手の影響を検討する必要がある。(安全行動学)